

高槻に移り住んで 30 年。以来、不思議に思っていることがあります。

枚方大橋付近は右岸左岸とも、防災にも配慮した整備は緑豊かなうえに四季折々の草花も見られる素晴らしい自然空間が広がって、いま更に拡大しつつあります。

穏やかな季節の時はそれで良いとして、意外にも強い春の陽射しや、煮えたぎるような真夏の太陽の下では運動はおろか散歩さえ考えものです。つまり木陰に入りたくても肝心の樹が見当たりません。水はあるものの、運動でもしようものなら脳天がクラクラして、それこそ自殺行為に等しいと言えます。

なぜ今日まで樹木を植えなかったのか、そのことについて地方建設局事務所(枚方)へ問い合わせました。一級河川の淀川には様々な基準があって、樹々がないのも防災機能をも勘案してのことで、それに係る基準(規制)も緩和の方向にあるので、今後は植樹が増してくるだろうとのことでした。そして、河川の氾濫によって河川敷が濁流に曝されたとき、漂流物が樹々に絡みつくことに防災上の問題があると言うのが先方の答えだと理解はしたものの、それだけでは十分に納得できるものではなかった。

そのことによってどのような悪影響が派生するのかは判りませんが、樹々が^{しがらみ}柵となってそれに絡みつくのであれば、人命どころか他の生き物も助かって、そうなるに越したことはないと思うのですが。

ここで、ヨシの保存や流域の生態系維持をも視野に入れて、いま淀川流域一帯が竹林や森林に覆われていると仮定した場合、その広大な地盤がいかに強固なものであるかは火を見るより明らかなのは勿論のこと、庶民はそこを年中憩いの場として活用し、鳥は四季を歌い、筍を始め自然の恵みはさることながら、あれもこれもと夢は無限に広がります。

今日までそうならなかったのが不思議に思えるのです。

堤防を頑丈なものにするのは大いに結構ですが、それに先立ってその基盤となる河川敷の植樹が重要だと考えます。

このたび、ギリシャから届いたオリーブの苗木 150 本は小泉総理も一枚噛んでの寄贈で、産廃の不法投棄で名を馳せた香川県の豊島に植樹された。時の弁護団長である中坊公平さんと建築家の安藤忠雄さんは、瀬戸内海の沿岸や島々をオリーブで埋め尽くそうと百万本の植樹を目指しています。海と川の違いはあるものの、どちらも大規模で気の長い話ですが、この際オリーブやマングローブでなくてもいい。日本の風土に合った広葉樹や針葉樹あるいは竹でいいのです。そして防災と環境を兼ね備えた豊かな森を私が生きている内に見たいものです。勿論、子供達にも見せてやり伝えていきたいのです。

*

生態系の悪化は水質汚濁に因るものやブラックバスなどの水中事情だけでなく、地上の植物だって尋常ではない。背高泡立ち草などの異常繁殖は衰えることなく実勢範囲を着実に拡大して、日本古来の可憐な草花は片隅へ追い遣られてやがては姿を消す。秋になっ

て辺り一帯を彩る黄の花が鮮やかに映っても、菜の花畑は年に一度の春だけで結構。このままいけば水の中も外も、いずれ外来種に占拠されてしまいそうな勢いです。

以前、キャンプを目的に何度か琵琶湖へ行きました。その度にあっちへ行きこっちへ行き、湖に注ぐ支流や疎水が汚くて、なかなか定着できなかった辛い思い出があります。

開発は山肌を削り、自然林を奪った。

現代社会は利便追及のあまり、処理剤・洗剤・農薬などで川・湖・海を汚してしまった。それが目に余ってくると時すでに遅く、治水がどうの湖沼がどうのと言っては河川や下水道整備を手掛ける。それも活力ある地域を優先的に進めた。湖に注ぐ水路を見れば判るように、そうしたところで水質は改善されるはずがない。

自然浄化にも限度があり、限界を超えてくると悪臭をも放つ。周辺にばかりいくらお金をかけても、根源(上流域)が手付かずや御座なりではいつまで経っても完全とは言えず、水の澄むヒマさえない。同じやるならもっと徹底して欲しいものです。人の住む山の麓や頂までは無理としても、その地域の環境に適した処理策があるはず。

いくら下々を突付いてもダメです。水は低きに流れることから、家庭の掃除と同じように上から下へが基本です。

行政の在り方や予算の関係はあるものの、長期的視野に立てば結果は必ずプラスになる。こんな解りきったことがなぜ今日もできないのか判然としないのです。

治水や環境整備にはもっと根源的なところに目を向けなければ、堂々巡りの可能性が大了。この不況下に仕事が増えて好都合かも知れないが、最近の世の風潮として、やっていることは税金のムダ使いだと突き上げられて批判的になり兼ねません。

「自然は自然が...」「川は川が...」と言う自然の摂理を曲げてしまったのは他ならぬ人間なのです。そういった自然の治癒力を解っていないながら、行政サイドは産業繁栄、消費拡大を旗印に、多少の逸脱や過失を見過ごしてきたそのツケは余りに大きいがために今もって不況を引きずり、それに並行して破壊された自然環境も果てしなく尾をひいている。

田、川、海岸と、どこもかしこもコンクリートで固めればよいと言うものでもない。一度失った自然は百年やそこらでは取り戻せない。安心して食べられる米をひと握りでも多く作ろうとするのが人間、一方ひと握りの化学物質(薬剤)や放射性物質で破壊を目論むのも人間。殊に後者に関してはいかに課せられた使命とはいえ、そのことを良く解っていないながら事の善悪に拘らず目標に向かって邁進するから、人間というのは実に始末が悪くて恐ろしくもある。だからといって前者は整備計画の全てに協力的であるとは限らない。

この相反する目的や考え方をもった分子をいかに納得させ融和させるかが当面の課題となって、当然のこととして双方の間には摩擦が生じる。そこで当事者を挟んだ三者間の調停が始まり、悶着のすえ双方の意を汲んで実行してきたのが今までの計画推進策であったように思うのです。全てとは言わないまでも、今日までの様々な結果を見る限りに於いて、ムダになったもの、中止になったもの、或いは取り返しのつかなくなったものなど、アトの祭りを思わせるのも少なくないように思います。

日本の労働賃金の 1/20 とも言われる中国の賃金に限りなく近づけようとする原点への回帰的構想もあるようです。これからはこの構想の下に、いちど原点に戻るくらいの積りで、大きく遠回りしてでも良いものは良いとして、淀川水系の整備構想を練っていただきたいのです。少しの妥協が、ややもすれば大きな妥協に成長し兼ねない。それも景気停滞の続く今の不況下であれば、計画実行は一層スムーズなものになるのではないかと思います。

近畿の水ガメである琵琶湖の流れを汲み、流域を潤す関西の大動脈としての淀川を世界に誇れる美しくも情緒あふれる河にしたいものです。

私は学者でもなければ有識者でもありませんので誤った意見を述べたかも知れません。当然、反論や忠告があるものと覚悟しております。その点を是非お示し願えたらと思っております。

以上